

# 大久保彦三郎の人物と学問について

—三島中洲との関係を中心として—

菊 地 誠 一

(二松学舎大学)

はじめに

大久保彦三郎（安政6〔1859〕～明治40〔1907〕年。剛石、在我堂と号した。）については、学校法人盡誠学園の関連書籍に詳しく、特に『盡誠学園百年史』（詳細は巻末「参考文献一覧」参照）の如きは、質・量ともに最も充実したものといえる。また、近年は研究紀要等に論ぜられる事も多く、その人物と学問について詳細をご存知の方も多しであろう。しかし、未熟ながら筆者なりに資料を漁ってみると、気掛かりな点がないわけではない。

そこで、本稿では彦三郎の一生を、師である三島中洲<sup>1)</sup>（天保元〔1830〕～大正8〔1919〕年。諱は毅、字は遠叔、幼名を廣次郎といい、後に貞一郎と称した。中洲はその号。時には桐南、風流判事、絵莊、晩年には陪鶴、陪龍なども号した。）の「大久保彦三郎君墓銘」に彦三郎自筆の「履歴書<sup>2)</sup>」を中心とした諸資料を織り交ぜて素描した上で、中洲との関係や彦三郎の学問等について、可能な限り関連書籍や研究紀要等<sup>3)</sup>との資料重複を避けて論じてみたい。

## 1. 生涯について

大久保彦三郎は、讃岐國三豊郡財田上村（現在の香川県三豊市財田上）の人。父は森治といい、母は曾乃という。安政6（1859）年8月16日に生まれる。

幼い頃から穎悟で学問を好んだ。香川県内での従学の変遷は、那珂郡十郷村（現在の仲多度郡まんのう町）の香川甚平なる人物に従学して漢学を修業、次いで高松の黒木茂矩<sup>4)</sup>に従学して漢学及び国学を修業、更に三豊郡仁尾町（現在の三豊市仁尾町）の僧である觀照に従学して漢学を修業、といったものであった。その間、上ノ村小学校「普通學全科」を卒業し、高松中学校でも学んだ。明治11（1878）年、19歳になると京都に遊学し、三國幽眠<sup>5)</sup>や松岡蘆村<sup>6)</sup>に従学して国漢の学を修業し研鑽した。翌明治12（1879）年6月、「二松學舎」に入学して三島中洲に従学し、同時期に設立された「斯文學會」でも漢学を修業、その傍らで成瀬大域<sup>7)</sup>に従学して筆道の修業も行った。途中、数ヶ月間ほど郷里の香川県（財田）での教員勤務を挟むも二松學舎で学んだ彦三郎であるが、明治14（1881）年の末、志業の中途にして疾病に罹り、保養のため香川に帰郷することとなる。ちなみに、二松學舎在学時分に於ける彦三郎の自筆漢詩が、『螢光雪影<sup>8)</sup>』という卷子に収められている。これは、中洲の門人で当時、二松學舎の幹事であった齋藤良一へ、同学から贈られた送別詩を中心に纏められたもの。卷子冒頭「螢光雪影」の揮毫は中洲最晩年の筆による。

彦三郎の漢詩は、「齋藤兄の歸郷するを送る」と題された次のもの。

旗亭把酒興難乘	旗亭に酒を把るも
	興 乗り難し
垂柳橋頭月未昇	垂柳の橋頭
	月未だ昇らず
今夕送君君去後	今夕 君を送り
	君 去りて後

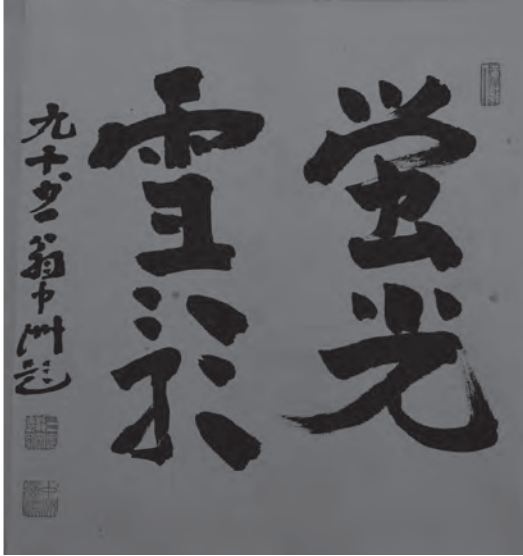
平成28年11月10日受理

連絡先 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

二松学舎大学 大学改革推進部大学改革推進課

TEL 03(3261)1285 FAX 03(3261)7413

Email s-kikuch@nishogakusha-u.ac.jp



中洲三島毅「螢光雪影」題字  
(二松學舎大学附属図書館蔵)

何堪独坐對書燈 何ぞ独り坐して書燈に  
對するに堪へん

送齋藤兄歸郷 辱交 大久保彦 拝

齋藤兄の歸郷するを送る

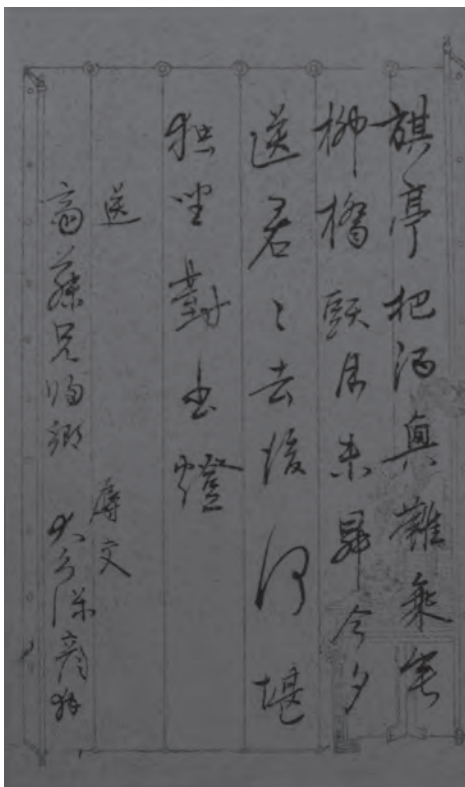
辱交 大久保彦 拝

1句目で、送別会会場で酒宴を催すも興味が乗らないと起句する。2句目で、会場近くの柳の木が立ち並ぶ畔に、月はまだ昇っていないと記し、酒宴が始まったばかりの夕刻まもない様子を時間的設定として承句に配置する。3～4句目では、この送別会が終り、齋藤氏がいなくなってしまった後、寂しさややるせなさに堪えられない、と結ぶ。

詩は、全体的に留別に対する「寂しさ」「やるせなさ」で統一されており、詩風は起伏が少なくスタンダードな形に纏まっている印象であるが、20代前半の彦三郎の詩作レベルを知り得る好資料といえよう。

なお、「螢光雪影」所収の齋藤良一及び山田準の識語によれば、明治14（1881）年の春に齋藤が「神奈川縣師範學校」の招聘に応じて横浜に赴任するに際し、諸友から送別の詩文を贈られたことが記されている。彦三郎の当該詩は、或いはその時のものか。

その後、明治15（1882）年3月から郷里で保養の傍らに親戚や知己、近村の子弟に漢学を教授し、明治17（1884）年3月から、同地に「私立忠誠塾」を開いて漢学を教授する。その一方で「夜學校」を設立して「三餘舎」と称し、郷里の住民の子弟に読書や算術、習字等を教授した。その傍らで衛生や勸業（農業や工業）、教育等の奨励のために地方の有志と相謀り「有終學會」を設立する。当時、同村全會の議員及び兵事集談委員（有事の際の相互救援等の委員）を務めもした。明治20（1887）年2月から3月にかけて、京都に寓して「忠誠塾」を移設し、名称を「盡誠舎」と改称した。また、教授の余暇に京都の萩野獨園<sup>9)</sup>及び物部義肇なる人物に従学して仏教を修業し、その一方で石津灌園<sup>10)</sup>に従学して詩文を修業した。更に、英書も自修した。しかし、明治25（1892）年になると、宿痼が再発し、病勢も危篤となったことから、遂に静養のため「盡誠舎」を閉舎して香川に帰郷する。明治27（1894）年、郷里の香川で「盡誠舎」を再開する<sup>11)</sup>。その後、善通寺街に移設して師範女子二部を増設し、多くの者が学



大久保彦（三郎）  
「漢詩箋（「送齋藤兄歸郷」詩）」  
(二松學舎大学附属図書館蔵)

びに集まった。その間、香川県会議員、同副議長、諸校の講師等を委嘱される。その他、公益や教育の諸会、議員や委員としての活動は枚挙に暇ないほどであった。そのような精力的な活動の労に感謝すべく、香川県教育会長からは木杯、仲多度郡長からは銀杯が贈られ、地元での徳望はとても高いものであった。しかし、明治40（1907）年7月19日、誕生日1ヶ月弱前のこの日、宿痾のひどい発病があり、遂に病歿してしまう。享年47歳であった。

## 2. 三島中洲との関係について

生涯の師ともいえる三島中洲との関係については、その萌芽を彦三郎の「送服部士善赴横濱序<sup>12)</sup>」に見ることができる。そこには、彦三郎が若くして学んだ香川甚平、黒木茂矩、桑門の觀照の三先生とも、常に山田方谷<sup>13)</sup>の徳業を称賛しており、彦三郎も方谷への従学を志すも、方谷は明治10（1877）年6月に逝去してしまい、大いに落胆したこと、後日に方谷へ従学できない無念を知人に語ったところ、知人から三島中洲が方谷の高弟で、東京に私塾を開いており、全国から多くの者が学びに集っていること、彦三郎が中洲に入門すれば、それは方谷に教えを受けることと同じではないか、とのアドバイスを受け、二松學舎への入学を決意したことなどが記されている。なお、彦三郎の二松學舎入学当時は、郡区町村編制法の関係で、その出身県の表記は「香川縣」ではなく、「愛媛縣」であった。彦三郎の二松學舎への「入學願」には、「愛媛縣下讃岐國三野郡財田上之村四百七番地、平民 森治長男 大久保彦三郎十九才十ヶ月」の文字が見える。

さて、彦三郎には剛石のほか「在我堂<sup>14)</sup>」の号があるが、これは二松學舎在学時に中洲に撰してもらったものである。盡誠学園所蔵資料には、次の資料が遺されている。「在我堂」の横書き文字に続き、

大久保君彦は、我が門に在ること久し。一日自ら悟りて曰く、學問の道は廣大なり、然ども取捨するは唯だ我在るのみ。余以爲らく名言なり。頃ろ其の堂號を問ふ。遂に此れを以て之に應ず。于時に明治辛巳七月。（原漢文）

明治辛巳とは、明治14（1881）年。七月という事は、彦三郎が宿痾により香川に帰省し療養する約半年弱ほど前、最も學問が充実していた時期といえよう。

宿痾により香川に帰省し療養した後の彦三郎と中洲の関係は、有名などころでは彦三郎が京都で盡誠舎を開学するに際し、中洲が學舎名を揮毫したことが知られる。この「盡誠」の字義等については後に記すとして、ここではもう一つのトピックスである中洲の岡山帰省と、それに伴う讃岐方面への周遊について記したい。

中洲の岡山帰省及び讃岐地方への周遊については、中洲の著書『歸展日誌<sup>15)</sup>』に詳しい。これは、明治26（1893）年7月15日に東京を出発し、9月10日に東京へ帰着するまでの漢文日記体の記録であり、中洲は8月25日から31日まで讃岐に滞在し、彦三郎に関する記載も多い。

讃岐への初日の様子としては、「廿五日。兩兒及び姪の竹を挈りて、汽船に駕る。玉島を發し、讃州に航り、錨を多度津の港外に下ろす。門人大久保彦三郎、三宅元興、安田繁太郎等小艇を舩し來り迎ふ。欣然として之を賦す。」（原漢文）との記載に続き、

故山遊遍又南航	故山 遊遍し 又南航す
汽笛聲中入讃洋	汽笛の聲中 讃洋に入る
迎我門生舩舟至	我を迎ふる門生 舩舟至る
他郷亦是似家郷	他郷亦た是れ 家郷に似たり

と記す。1～2句目で地元岡山へ帰省してから讃岐へと渡航し、汽笛の音の響く中で到着が近付いた、というところから起句する。3句目で讃岐の門人との再会を記し、4句目で前句を受け、見知った門人との再会もあり他郷である讃岐が恰も自分の故郷であるかのようだと結句し、彦三郎を始めとした門人との再会を喜ぶ様子を記している。

また、盡誠舎についても中洲は触れており、「三十日。彦三郎盡誠舎生を會し、余を延き賓と爲す。彦三郎曾て西京に在りて舎を開き、生徒一千人を過ぐ。近ごろ疾に罹り歸養す。讃者猶ほ數十人在り。

故に此の會有り。醉餘賦して似す。」(原漢文)との記載に続き、

以文會友古言存	以文會友 古言存す
喜聽青衿相討論	喜び聽く 青衿 相討論するを
舍主於吾如孝子	舍主は吾に於ては 孝子の如し
滿堂年少是良孫	滿堂の年少 是れ良孫

と記す。1句目で『論語』顔淵篇にある「曾子曰く、君子は文を以て友を會し、友を以て仁を輔く。」(原漢文)という言葉があるが、まったくその通りである、と起句する。2句目では盡誠舎の学生達が討論し合う様子を楽しく聴き入っている様子を記す。3～4句目がこの詩の眼目で、盡誠舎主の彦三郎は門人として孝行息子のようなものなのだから、会場にいる盡誠舎の学生達は良き孫達のようにだ、と結句する。

更に、同日の記載として、

彦三郎宅は四條村に在り。此れ一里弱を距て、此の夜乳母幼男を抱き來り謁す。怜悧にして愛すべし。(原漢文)

とある。或は、これは大久保彦三郎の嗣子の直廣か。この頃、中洲の名声は徐々に高まっていたのであろう。

卅一日。終日、揮毫。土人の需に應ふるなり。(原漢文)

と記されている。中洲の揮毫は、全国に多く遺されているが、ここにもその一端を窺うことができよう。

なお、中洲は岡山帰省及び讃岐周遊の約1ヶ月前、(明治26年)6月29日付の書簡を彦三郎に送る。

去ル十八日附御狀致拜見候御不快も追々御順快ニ付御多用之由何より可喜事ニ御座候。盡誠社御再興最妙ナリ。近來、都下モ漢学再興之勢ニ而弊塾も二百名之生徒集り居申候。御地方ニ而も斯文御再興奉祈候。于時兼テ之御勸メモ有

之。久振琴平參詣致度、七八月之交ニハ御地へ罷出可申、因テ別紙連名之手紙差出置候間、御廻覽被下候様奉祈候也。

ここには、彦三郎の宿痾の回復、盡誠舎の再興、漢学の機運の高まり、そして最後に中洲の帰省及び讃岐への往訪を告げる内容が記されており、中洲と彦三郎の緊密な関係の形跡を見て取ることができる。

加えて、余説を今一つ。上記、『歸展日誌』にみられる中洲の讃岐周遊は彦三郎が病氣療養のため「京都盡誠舎」を閉舎した明治25(1892)年8月から、所謂「四條盡誠舎」を再興する明治27(1894)年3月の間の事。遡ること旅程の約1ヶ月前、中洲が彦三郎に宛てた書簡は、明治26(1893)年6月18日の彦三郎から中洲への来信の返書であるが、書簡中「御不快も追々御順快ニ付御多用之由何より可喜事」「盡誠社御再興最妙ナリ。」とあり、『歸展日誌』に記載される中洲の出迎えや宿の提供、酒宴の開催や中洲の漢詩などからも、彦三郎の回復ぶりと「四條盡誠舎」の再興の前兆が見て取れる。確かに、彦三郎の自筆「履歷書」にも、

一、明治二十六年ヨリ二十七年末ニ至ル其間病氣靜養ノ傍ラ有志ノ望ニヨリ修身歴史作文等ノ科ヲ教授

とあり、明治27(1894)年3月「四條盡誠舎」の正式な再興前に、既に盡誠舎は活動を再開していた事実が知られる。

その後も、彦三郎と中洲の師弟関係が継続することは、盡誠学園に今なお現存する書簡をはじめとする諸資料からも明白である。

さて、彦三郎が逝去したのは、先に記した通り明治40(1907)年7月19日のことであるが、その後、中洲は「大久保彦三郎君墓銘」を明治43(1910)年2月の日付で撰している。この墓碑銘を巡って、中洲から彦三郎の息子である直廣に宛てた次の書簡がある。

御亡父碑文之義御尋被下右者案外之至ニ御座候。昨冬カ當春カ出來、山下谷次<sup>16)</sup>へ相届ケ



候處、其後何之返書モ無之ニ付、讃州へ送呈候哉否尋遣候處、五月頃、別紙之返書參り候迄ニテ、今ニ來車モ無之事ニ御座候。不思議千萬之事ニ候間、何卒貴所へ山下へ御催促可被成候也。

要約すると、彦三郎の墓碑銘は既に出来上がっており、山下谷次（京都盡誠舎卒業生、彦三郎門人）に届けたところ、何の連絡もないため、直廣氏からも督促してみてほしい、といったものであり、消印から墓碑銘を撰した年の7月29日の日付が読み取れる。

その後、墓碑銘の原稿が直廣に届いたからであろうか。中洲から直廣への次の書簡がある。

御手紙拜見。愈御安健奉賀候。然者碑文潤筆トシテ金壺封御贈被下辱候。受納致候。先ハ右、御受迄。艸々尽。

直廣からの書簡とともに、墓碑銘の作成料を受け取ったという礼状である。日付は、同じく明治43(1910)年の10月7日と消印から読み取れる<sup>17)</sup>。

### 3. 「盡誠」の字義について

中洲が彦三郎に贈った「盡誠舎」の揮毫は、後に木製の扁額として作成され、現在も盡誠学園に所蔵されているが、そこには中洲の筆跡による「盡誠舎」の三字に続き、その由来として次のように記される。

大久保君、盡誠を以て學舎に名づく。蓋し誠ならざれば物無し。天下の事、誠に由らずして成すこと莫し。而して之を盡すは學に在り。余甚だ其の名を嘉とし、請に應じて之を書す。于時に明治丁亥七月。中洲毅（原漢文）

明治丁亥とは、明治20(1887)年。中洲58歳。「中洲三島先生年譜<sup>18)</sup>」によると、この年の7月1日、中洲は明治3(1870)年に当時は幼児であった長男の桂に譲った戸主としての権利を自身に戻している。この後、7月15日から31日まで、甲府の人の招きに応じて旅行をしているため、「盡誠舎」の揮毫は時

期的には同月の前半に記されたものと推定される。

さて、中洲の揮毫の文中「誠ならざれば物なし」とは、『中庸』（『中庸』は、南宋の朱熹が『禮記』中より『大學』とともに抽出して一書としたもの。『論語』と『孟子』を加えて「四書」という。）の言葉。中洲の著書『學庸私録<sup>19)</sup>』所収『中庸私録』（以下『中庸私録』と記す）では「不誠無物」の箇所に、

鶏の時鳴、猫の捕鼠は、鶏猫の實理なり。鶏若し時鳴せず、猫捕鼠せざれば、鶏猫無しと謂ひて可なり。故に誠ならざれば物無しと曰ふ。誠は人物の實理なり。人物其の實理に由らざれば、人物無しと同じなり。所謂肉行屍立なり。（原漢文）

と記し、鶏の時鳴や猫の捕鼠といった卑近な例を示し、それぞれの性を尽くすことの「實理」について述べ、それと同様に人間の誠があることは天から与えられたもので、その誠を尽くすことは同じく「實理」であると記す。

同じく中洲の著書『學庸講義<sup>20)</sup>』所収『中庸講義』（以下『中庸講義』と記す）でも同様の方向性を示した内容を記す。中洲は先ず『中庸』本文を、

誠は自ら成すなり。而して道は自ら<sup>みちび</sup>道くなり。誠は物の終始。誠ならざれば物無し。是の故に君子は誠を之れ貴と爲す。

と訓じ、「誠ならざれば物無し」の部分に次のように講義する。

誠者萬物ノ始ト終リヲナシ、始終物ト離レザルモノナリ。若シ離レテ不誠ハ、物アレドモ、無キト同然ナリ。例ヘバ人ハ人タル五常五倫ノ實理、即チ人ノ誠アリ。若シ其實理ヲ行ハズ、人ノ誠ナキトキハ、形ハ人ナレドモ、禽獸ト同ジ。是レ人タル物ナキナリ。又猫ハ鼠ヲ捕フル實理、即チ猫ノ誠アリ。若シ鼠ヲ捕フ能ハズ、猫ノ誠ヲ失フトキハ、形ハ猫ナレドモ、他ノ獸ト同ジ。是レ猫タル物ナキナリ。萬物ミナ此ノ如シ。故ニ曰、不誠無物ト。

このように、中洲は先述の『中庸私録』同様に誠は終始一貫するものであり、人が人である理由だと説く。更に、猫が鼠を本能により捕獲するという卑近な例を示すことにより、読者に分かりやすく説明する。

また、本節の結語として、

誠ヲ以テ己ヲ成スコトヲ説ク。即チ上文ノ其性ヲ盡スコトナリ。

とも記す。

この「上文ノ其性ヲ盡ス」についても、中洲の記載を見ていこう。

『中庸私録』では、同章に対する記載の前半に、

性中實理有るのみ。實理は即ち誠なり。誠は即ち性なり。二物に非ず。其の性を盡せば己を修むるなり。人の性を盡せば人を治むるなり。物の性を盡せば物を治むるなり。人物各天則有り。之をして天則に従い其の生を遂げしむれば、以て、天地の化育を賛す可し。盡の字は知行を兼ね。(原漢文)

と記す。これは、先述の鶏の時鳴、猫の捕鼠、人の誠について言えば、それぞれ性を実践してこそ意味があるという事になる。「盡の字は知行を兼ね」の一文は眼目であり、性中の実理を実践することは、天地万物の靈妙な働きに合致する万物一体的な説明を行い、その一元論的内容の展開を示す。

同じく『中庸講義』で、中洲は『中庸』本文を、

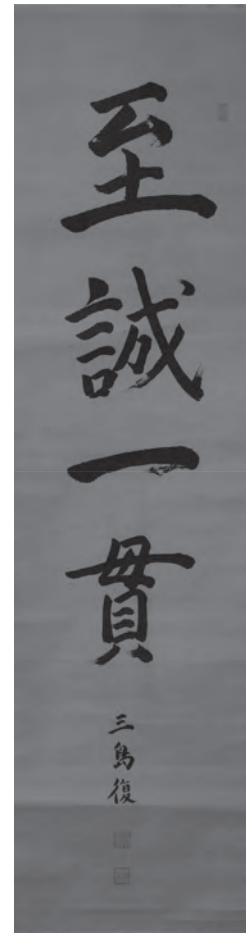
唯だ天下の至誠は、能く其の性を盡すを爲す。能く其の性を盡せば、則ち能く人の性を盡す。能く人の性を盡せば則ち能く物の性を盡す。能く物の性を盡せば、則ち以て天地の化育を賛く可し。天地の化育を賛く可ければ、則ち以て天地と參つなる可し。

と訓じ、その前半部分へ次のように講義する。

唯天下第一等ノ至誠ナルモノハ、能ク其天ヨリ受得タル性ヲ盡シ行フコトヲ爲ス、何トナレバ



中洲三島毅「忠」色紙（筆者蔵）



雷堂三島復（中洲季男）  
「至誠一貫」書幅（筆者蔵）

性ノ實ハ、誠ノ實理ノミ。其實理ヲ行ヒ盡セハ、即チ性ヲ行イ盡セバナリ。

このように、中洲はここでも『中庸私録』と同様に「至誠＝至性」→「性＝誠」→「盡誠＝盡性」と講義を展開し、性（＝誠）の実践を説く。

以上のように、中洲の示す「盡誠」とは、天から人に賦与された性であるところの誠を体認自得し、天理に合致した実践をすることが「盡誠」とであると小結する。

#### 4. 大久保彦三郎の讃岐における同時代評価について

本章では、彦三郎の讃岐における同時代人の評価について、浅岡留吉（春雪山人）著『現代讃岐人物評論（一名讃岐紳士の半面）』所収「盡誠舎長 大久保彦三郎先生」を紐解き、若干の考察を加えてみたい。先ずはその冒頭、

指を讃州の教育家に屈するもの、必らず先ず大久保彦三郎先生を推す。別に岡内清太<sup>21)</sup>先生ありて能く育英事業の爲めに盡し、黒木欣堂<sup>22)</sup>先生ありて亦能く學窓の教鞭を執れりと雖も、前者は育英機關の設備に専らにして所謂教育家なるものに屬し、後者は利害得喪敏くして世道人心を導くの資格を缺く。盡誠舎長大久保彦三郎先生、獨り卓然として此間に介立し、私立盡誠舎に長として海南の子弟を薰陶すること茲に拾有餘年、その效績の見るべきもの亦甚だ尠からず。先生夫れ奈何なる人か。

と記し、彦三郎が育英事業と人道・人格を兼ね備えた「教育家」とであると記す。確かに、岡内清太はその経歴が示す通り、教育機関における組織運営や育英事業の整備に功績のあった人物である。また、黒木欣堂も、香川県を代表する漢学者・書家の一人として活躍するも、著者の浅岡留吉（春雪山人）から見れば、「世道人心を導くの資格を缺く」人物として評される。大久保彦三郎は、歴史的には一定以上の評価を受けているであろう両者を凌ぐ人物と位置付けられている点が興味深い。次いで同書では、彦三郎の来歴を、

先生や、中洲三島翁の門に入りて、經學を修め、出で、門戸を張りて育英の任に當る。その基礎とする所は固より支那學にあると雖も、先生の炯眼なる、早く既に西洋文明の尊重すべきを知り、精神的教養を聖賢の道に求めて物質科學の研究を西歐の學者に尋ぬ。故を以て尋常漢學者流の迂遠なく、西洋心醉者流の高襟の厭味なく、能く學問と實際とを調和して處生の要訣を悟る。人或は先生の經學を以て淺薄取るに足らずと爲し、流暢の辨と固有の才能とは、先生をして表面學者たるの觀を呈せしむと議すと雖も、余輩の先生に採る所はその學問に非ずして才能にあり。若し學問と社會とを調和するを以て眞正の學者に非らずとせば、眞正の學者たらざる所は是即ち先生の長所也。先生有韻の文を列ねず、その技術に近づくを忌むが故也と。以てその抱懷を窺ふに足るべく亦人物を想見すべきに非らずや。

と記し、その人となりを説明する。そこには、師の中洲と同様の評価も多い。特に「經學を修め、出で、門戸を張りて育英の任に當る。その基礎とする所は固より支那學にあると雖も、先生の炯眼なる、早く既に西洋文明の尊重すべきを知り、精神的教養を聖賢の道に求めて物質科學の研究を西歐の學者に尋ぬ。」など、二松學舎創設後の中洲の評と暗合するものも多い。更に、著者の浅岡留吉（春雪山人）は彦三郎を「才能」があり「學問と社會とを調和する」学者であると評する点に同書の特徴があろう。そして文中、その結語として、

今や教を先生の膝下に受けしもの漸く當代に現はれんとす。先生たるもの夢にも政治界杯に色氣を有することなく、盡誠舎を死守して墳墓の地と爲せ。大學一卷説く所これ誠のみ。誠を盡して人を教ゆ。實に先生の本懷に非ずや。

と記し、政治と教育の双方に「才能」を有する彦三郎ではあるが、「教育者」として「盡誠舎」を守り抜くべきである、と結語する。特筆すべきは、段落後半「盡誠舎を死守して墳墓の地と爲せ。（中略）。誠を盡して人を教ゆ。實に先生の本懷に非ずや。」

と記し、「誠（盡誠）」が彦三郎を語る上でのキーワードであり、評価とエールを送っている点に於いて、浅岡留吉（春雪山人）の同書における彦三郎評価の特色があらう。

## 5. 大久保彦三郎と「誠」について

ここまで、師の中洲による「盡誠」字義や同時代人の浅岡留吉（春雪山人）による彦三郎評価等について記してきたが、本章では彦三郎と「誠」の関係性について、今一度、諸資料から再確認しておきたい。

彦三郎と「誠」との関係性を鑑みるにあたり、筆頭に挙げられるのはその塾名「忠誠塾」「盡誠舎」であろう。「盡誠」については、その字義について既に記したが、「忠誠」についても、同じく中洲の文章を用いて見てみよう。『盡誠會雜誌』第壹號（明治23〔1890〕年5月発行）所収の「忠恕の説」には、本文に先立ち、「盡誠會ニ寄贈スルノ言」として次の一文を載せる。

大久保彦三郎君、頃口盡誠會ナルモノヲ設ケ、余ニ一言ノ寄贈ヲ乞フ。君元ト我ニ松學舎ヨリ出ズ。余喜ビテ其求ニ應ゼザル可ラズ。然ルニ、余官務多忙ニ際シ、構思スルコト能ハズ。因テ近比講演セシ忠恕説ヲ以テ其責ヲ塞グ。蓋シ、盡誠ノ誠ハ即チ忠恕ノ忠ナリ。其忠誠ヲ推盡シテ人々ニ及ボスヲ恕ト云フナラバ、盡誠ノ誠モ亦恕ノ代字ト看テ可ナリ。然則盡誠ト忠恕ハ異字同意ト謂可シ。故ニ、此説ヲ贈テ盡誠會ヲ賛成スルモ不適當ニハ非ザル可シ。六十一翁中洲三島毅

「忠恕の説」は、中洲の講演録『中洲講話<sup>23)</sup>』未収録の一篇で、『盡誠會雜誌』掲載の3ヶ月前、明治23（1890）年2月から雑誌『東海北斗<sup>24)</sup>』第三・四・六・七號にも分載されている。なお、同篇は『東海北斗』第三號によれば「東洋英和學校に於て」講演されたものであり、『盡誠會雜誌』第壹號によれば「山田武八郎 速記」の名が記されており、それぞれにより会場及び講演筆記者の名を知ることができる。

さて、『盡誠會雜誌』第壹號の中洲の序言は、講

演本文を凝縮した側面もあるが、特に「誠」＝「忠」、「盡（誠）」＝「恕」、「盡誠」＝「忠恕」と論が展開する点に注目したい。演説本文にも、

其忠と云ふ者は何う云ふことか。忠は中心と云て中の心を言ふ。己を盡すを忠と云ふと朱子が説て居りますが、心の底から出してチットモ虚偽のないことを申す。夫れで忠をまこと、訓ず。恕と云ふは何うかと云ふに、矢張り字の通り心の如くすると云ふので、我心に本當にさう思つたらば、人を接遇うにも矢張り其通りにすると云ふことである。忠恕の二字は何う云ふことかと云ふて自から考へてみますと、一番自分が可愛い。誰でも自分は何うか活きたい、死にたくないと言ふのは誠で、鳥渡も虚偽がない。夫れが本當ならば人も其通りで、自分の可愛い如く人も可愛がらなければならん。之が心の如きなり。然るに私ハ活きたいが人は半分位活してやりよふと云ふのは忠恕ではない（喝采）。

とあり、先の序言と同様の方向性を記している。

なお、「忠恕」といえば『論語』里仁篇「夫子の道は忠恕のみ<sup>25)</sup>」を想起するが、中洲『論語講義<sup>26)</sup>』当該箇所「忠恕」の字義説明にも「忠は己の誠心を盡くす、恕は己を推すなり。所謂己の欲せざる所は人に施すこと勿きは、是れ恕なり。」とあり、先の「盡誠」字義の章と併せて舎名由来の「忠誠」「盡誠」に関連することからも興味深い。

このほか、学校法人尽誠学園ホームページ「尽誠写真館<sup>27)</sup>」及び『盡誠学園百年史』冒頭に掲載の「学祖書斎」には中洲自筆による「徳潤身」の扁額が見える。『盡誠学園百年史』には、同画像のほか中洲自筆の扁額を木額にした写真を掲載（310頁）し、その由来として盡誠舎所蔵の伝斎藤拙堂の扁額「富潤屋」を中洲が本物と見なし、対として「徳潤身」の書を贈ったと記される。「徳潤身」は、夙に知られる『大學』（『禮記』大學篇）の言葉。中洲『大學講義』では当該箇所本文を、

富屋を潤し、徳身を潤す。心廣ければ體胖か。故に君子必ず其の意を誠にするなり。



と訓じ、以下の如く講義する。

中ニ財貨富メハ、必ズ外ノ家屋ヲ潤澤ニシ、美麗宏壯ノ營繕ヲ爲シ、心ノ中ニ德アレハ、必ズ外ノ身體ヲ潤澤ニシ、衣服ヲ整ヘ、威儀ヲ修ム。心ノ度量カ廣ケレハ、身體ノ運動カ自然胖カトテ、安ク舒ヒテコセ―セズ。是レ皆中に誠アレハ外ニ形ル、ノ證ナリ。故ニ君子ハ必ス心中初發ノ意ヲ誠ニシ、外ノ身家國天下ニ及ホスナリ。

ここにも「誠」との関連が示されるが、「徳潤身」の扁額は「誠」を身の本質として發揮（盡誠）した彦三郎の書齋に掲げられるに相応しいものといえよう。

最後に今一つ、盡誠舎で発刊された雑誌名にも注目したい。

盡誠舎では、明治23（1890）年5月11日、『盡誠會雑誌』第壹號を刊行する。その例言には「一本誌ハ盡誠會主旨ニ基キ道德教育學術等ニ關スル事項ヲ掲載スル」と記される。ここで記す「主旨」とは、定憲「第三條 本會ノ主旨左ノ如シ」と記された次のもの。

- 一 一思一行良心至誠ノ許ス所ヲ盡ス
- 一 忠孝ノ道ヲ守リ愛國ノ情ヲ養フ
- 一 智ヲ致シ能ヲ盡シ且ツ時ト地トヲ論ゼズ長ヲ取り短ヲ捨テ實利公益ヲ興ス

同誌は、後に『誠』と誌名を変更するが、これも彦三郎にとっては広義に於いて「誠」というものに対する、より一層の本質的なものへの特化の一端と見てとれよう。また、偶然ではあるが誌名がより本質的なものへ変遷するという点についていえば、中洲の創立した二松學舎に於いても、明治29（1896）年5月8日に第一號が刊行された『二松學友會誌』（大久保彦三郎も、「特別委員」として香川県の代表の一人として参画の記載あり）が中洲の歿後、二松學舎専門學校の創設を経て『二松』という誌名で継承されていく経緯と暗合する点も歴史の偶然か。

おわりに

人孰無誠	人孰れか誠無からん
不盡何益	盡さずんば 何ぞ益あらん
嗟君篤學	嗟 君は學に篤く
盡誠誘掖	誠を盡して誘掖す
果如舍名	果して舍名の如く
斃而不息	斃れて息まず
箕裘 <sup>28)</sup> 有子	箕裘の子有り
永繼遺績	永く遺績を継ぐ

これは、三島中洲撰「大久保彦三郎君墓銘」の結句部分。

大久保彦三郎の一生は、数えて49歳、満47歳と決して長いものではなかったが、生涯の師とも呼べる中洲三島毅との出会い、地元香川県における政治的活動、そして何よりも育英事業に於いて多くの功績を残した。これは、師の中洲の創立した二松學舎と同様、時代及び地域から求められ、評価された証左といえよう。そして、何よりも良き後継者に恵まれ、現在に至るまで高等教育機関として継続していることも特記すべき事項であろう。

その彦三郎の一生は「誠」というキーワードと密接に関わるものであった。それは、「忠誠塾」や「盡誠舎」といった塾舎の名称や書齋に掲げられた扁額、塾舎発行の会誌名等に見られる物理的なものから、塾舎の名称の由来や心中に内在する精神的なものに至るまで、彦三郎を語る上で欠かすことのできないものであった。

以上のように、大久保彦三郎の一生は「誠」で一貫されたものであり、且つ生涯の師ともいえる中洲三島毅の存在とも密接に関わったものであり、今なお現在に至るまで継承された学問系譜の一形態であると結論したい。

最後に、今後の課題についても記しておきたい。本稿では、活字化された彦三郎関連資料を基に、その一生を素描したうえで、「誠」との関連を物理的・精神的の両側面から論じた。筆者は、その淵源に彦三郎が従学を希望するも叶わなかった中洲の師でもある方谷山田球への憧憬の念に端を発するものではないかと考えている。しかしながら、既存の資料ではそれを証明することは難しく、更なる研究活動を

継続していく必要性を実感するとともに、盡誠学園における今後の創立者研究の進展も期待したい。また、同様に本稿では、彦三郎の師である中洲三島毅の資料を中心に論じたが、盡誠舎所蔵の会誌や自筆資料等により、彦三郎の詩風や思想についても考究したいと願う。これも前者同様、盡誠学園における創立者研究の進展を待ちたいと願う次第である。

## 注

- 1) 三島中洲、天保元(1830)年12月9日～大正8(1919)年5月12日。諱は毅、字は遠叔、幼名を廣次郎といい、後に貞一郎と称した。中洲はその号。時には桐南、風流判事、絵莊、晩年には陪鶴、陪龍などとも号した。備中國窪屋郡中島村(岡山県倉敷市中島)生まれ。山田方谷、齋藤拙堂、佐藤一齋、安積良齋等に学ぶ。備中松山藩では藩校有終館會頭・學頭、吟味役、洋学総裁兼務等を務め、維新後は新治裁判所長、大審院中判事、東京帝國大學教授、東宮侍講、宮中顧問官等を歴任。明治10(1877)年10月10日、東京に漢学塾二松學舎を創立。なお、詳細については、拙稿「三島中洲の陽明学自得時期について」(『陽明学』第八号—山田清齋特集号)、平成8(1996)年3月、二松學舎大學陽明学研究所発行、38～58頁参照。
- 2) 「大久保彦三郎君墓銘」については、松尾政司氏「三島中洲より大久保彦三郎への書翰(続)」所収の影印資料(38頁)を参照し、彦三郎自筆「履歷書」については『盡誠学園百年史』(6～9頁)を参照した。
- 3) 大久保彦三郎についての関連書籍及び研究資料は、本稿巻末「参考文献(大久保彦三郎関係)」参照。
- 4) 黒木茂矩、天保3(1832)～明治38(1905)年9月26日。字は子芳、号は蟬齋、通称は倉太郎。茂矩はその諱。黒木欣堂(後掲注22)参照)の父。明治時代の神職、国学者。
- 5) 三國幽民、文化7(1810)年10月1日～明治29(1896)年5月31日。諱を直準、字を士繩、通称を與吉郎といい、後に大學と称した。号は鷹巢、碌々山人。幽眠は、出家後の号。越前三国(福井県)生まれの漢学者。初め徂徠学を学び、上洛して折衷学を学ぶ。梁川星巖や森田節齋とも交流。安政の大獄で弾圧され、赦免後に剃髪した。
- 6) 松岡蘆村、?～明治22(1889)年6月19日。通称は正貫、字を正貫という。蘆村はその号。讃岐國仲多度郡(香川県善通寺市)の人。大阪で後藤松陰、後に備中で阪谷朗廬に学ぶ。なお、当該項目は『盡誠学園百年史』引用の『讃岐人名辞書』記載の概要抜粋による。
- 7) 成瀬大域、文政10(1827)年1月～明治35(1902)年2月5日。諱は温、字を子直、通称は久太郎。大域はその号。別號に桂齋、賜硯堂主人など。遠江国佐野郡(静岡県掛川市)生まれの書家。漢学を安井息軒らに学び、明治8(1875)年に宮内省へ奉職した。
- 8) 螢光雪影は、齋藤良一(安政4〔1857〕年～大正11〔1922〕年、諱は懋、字は克勤、号は甲山という。良一はその通称。)の送別詩文を纏めた卷子。三島中洲の題字を始め、七言絶句34首、七言律詩6首、和歌1首、齋藤良一と山田準の識語を収める。『三島中洲と近代—其三一』大学資料展示室〔編〕、平成27(2015)年3月、二松學舎大學附属図書館発行、4～5頁、34～35頁参照。なお、山田準は、慶應3(1867)年11月23日～昭和27(1952)年11月21日。幼名は鏑三郎、字は士表、号は濟齋。準はその諱。山田方谷(本稿注13参照)の義孫。東京帝國大學(入学時は東京大學。在学中、帝國大學令が公布される)古典講習科漢書課卒業。第五高等学校教授、第七高等学校教授、二松學舎専門學校初代校長等を歴任。明治末期・大正・昭和初期の陽明学者として夙に知られる。
- 9) 萩野獨園、文政2(1819)年6月～明治28(1895)年8月10日、諱を承珠、号は退耕庵。獨園は、その字。備前児島郡(岡山県)の臨濟宗僧侶。廃仏毀釈の際の相国寺住職。大教院院長として、臨濟宗・曹洞宗・黄檗宗を統轄、兼務した。
- 10) 石津灌園、天保14(1843)年～明治24(1891)年8月29日。諱は賢勤、後に發と改める。字は子儉、子節。通称は發三郎という。京都生まれの儒者。明治8(1875)年に太政官修史局へ入局。ほどなく病により辞職し、教育と著述に専念する。

- 11) 所謂「四條盡誠舎」の再興年については、中洲「大久保彦三郎君墓銘」及び「四條盡誠舎設立申請書類」では明治28(1895)年とする(設立申請書類は2月27日)。本稿では、「私立盡誠舎畧則」, 及び「盡誠学園年表」(『盡誠学園百年史』1055～1094頁)に拠り、明治27(1894)年(3月1日)を再興年とし、以下これに従う。
- 12) 「送服部士善赴横濱序」は、彦三郎の二松學舎在学中、明治14(1881)年2月1日の漢作文課題。『盡誠学園百年史』34～36頁参照。
- 13) 山田方谷、文化2(1805)年2月21日～明治10(1877)年6月26日。諱は球、字は琳卿、通称は安五郎。方谷はその号。備中松山藩領西方村(岡山県高梁市)生まれ。幼少より神童と称せられ、長じては藩の要職を歴任し、時の備中松山藩主板倉勝静の顧問として藩政改革に取り組む。維新後は、家塾や閑谷学校で子弟教育に従事する。門人には、三島中洲(前掲注1)参照)のほか、多数の有用な人材を輩出した。仮に、方谷に数年の余命があれば、彦三郎もまた方谷門下に名を連ねていたことであろう。
- 14) 在我堂の号については、松尾政司氏「三島中洲より大久保彦三郎への書翰(続)」所収の影印資料(46頁)を参照。
- 15) 『歸展日誌』は、明治26(1893)年12月30日、二松學舎發行、1巻1冊から成る排印本。同年7月15日から9月10日まで、郷里の備中への帰展と讃岐への周遊を記した漢文日記。讃岐へは、8月25日から9月4日まで滞在した。また、同書には明治25(1892)年10月8日に中洲が大磯へ小野随鷗を往訪した時の漢詩を収録した「遊湘小稿」に漢文二篇を附し、更に明治26(1893)年9月2日に後樂園(岡山)で催された宴席での朋友や同志の惠贈詩歌を集めた「瓊琚詩歌(後樂園譚集詩并引)」も附す。山口角鷹著「中洲書誌」(『三島中洲—二松學舎の創立者』所収)203～204頁、及び高山節也編「二松學舎大學附屬圖書館藏三島文庫別置本目録解題」(戸川芳郎編『三島中洲の学芸とその生涯』所収)544頁参照。
- 16) 山下谷次、明治5(1872)年3月30日～昭和11(1936)年6月5日。香川県仲多度郡十郷村(現在のまんのう町)生まれ。琴平町の明道塾で学び、京都盡誠舎を卒業。卒業後は幹事等を務め、閉舎後に上京。明治36(1903)年、東京商工学校(現在の埼玉工業大学)創設。大正13(1924)年、衆議院議員に当選。以降、5度当選。妻は画家の山下紅畝。『盡誠学園百年史』161～163頁参照。
- 17) 「大久保彦三郎君墓銘」撰文経緯についての書簡(影印)は、松尾政司氏「三島中洲より大久保彦三郎への書翰(続)」35～39頁参照。
- 18) 「中洲三島先生年譜」は、中洲の門人の輯録で、初輯が明治32(1899)年の中洲古稀の年に成り、続輯が明治42(1909)年、再続輯が大正6(1917)年、再々続輯が昭和12(1937)年に成っている。本稿では、中洲の逝去までを記す唯一のものである再々続輯(『二松學舎六十年史要』二松學舎[編], 昭和12[1937]年12月發行)所収のものを使用した。詳細は、拙稿「三島中洲の陽明学自得時期について」(前掲注1)), 注(4), 57頁参照。
- 19) 『學庸私録』は、明治38(1905)年12月25日、三島毅發行、「大學私録」「中庸私録」を収録し、1巻1冊から成る線装本。山口角鷹著「中洲書誌」(前同)213頁、及び高山節也編「二松學舎大學附屬圖書館藏三島文庫別置本目録解題」(前同)548～549頁参照。なお、本稿では二松學舎大學附屬圖書館所蔵の門人による自筆本を参照した。
- 20) 『學庸講義』は、明治43(1910)年6月18日、益友社發行、「大學講義」「中庸講義」を収録し、1冊から成る洋装本。山口角鷹著「中洲書誌」(前同)227～229頁参照。
- 21) 岡内清太、文久3(1863)年12月28日～昭和19(1944)年9月25日。九思義塾で学び、明治16(1883)年に小学校校長、明治22(1889)年に香川県教育会を結成、明治24(1891)年に進徳女學校設立。明治35(1902)年に香川県育英会を創設。香川県内の学校教育の基礎を創る。
- 22) 黒木欣堂、慶應2(1866)年3月11日～大正12(1923)年8月31日。諱は安雄、字は武卿、欣堂はその号。別号は欽堂、著園。黒木茂矩(前掲注4)参照)の子。讃岐國那珂郡(香川県仲多度郡)生まれ。片山冲堂、次いで二松學舎に学び、東京大学古典講習科へ進学。卒業後、香川県尋常師範學校教諭、香川工芸學校長、東京帝國大學、東京美術學校、二松學舎の講師を勤める。明治44

(1911) 年、書法會を設立し月刊誌『書苑』発行。  
明治・大正期の漢学者・書家として知られる。

付記

23) 『中洲講話』は、明治42(1909)年11月5日、文華堂書店発行、洋装本1冊。山口角鷹著「中洲書誌」(前同)222~224頁、及び高山節也編「二松學舎大學附屬圖書館藏三島文庫別置本目錄解題」(前同)553頁参照。三島中洲の講演記録三十篇に附録三篇を収録する。なお、『中洲講話』の発行経緯については、拙稿「本城問亭の人物と学問—『問亭遺文』を中心として—」(『国士館大学漢学紀要』国士館大学漢学会〔編〕平成26(2014)年3月発行)60~63頁参照。

24) 『東海北斗』は、明治23(1890)年から明治26(1893)年、北斗文社(二松龔内)発行。高山節也編「二松學舎大學附屬圖書館藏三島文庫別置本目錄解題」(前同)542~543頁参照。その例言に「本誌ハ近古諸大家ノ講談詩文雜著等ヲ採録シ斯學ノ蘊奧ヲ發輝シ東洋ノ學海ニ北斗星ノ新光輝ヲ煥發スル者ナリ」と記す。

25) 「忠恕」については、その解釈において多岐に亘る歴史の変遷がある。それらを体系的に理解する上で、特に中国近世の思想史的解釈を踏まえた論文に「近世中國における恕の諸相」松川健二〔著〕、『二松(大学院紀要)』第10集、平成8(1996)年3月、二松學舎大學発行、268~294頁参照があり、参考となろう。

26) 『論語講義』は、大正6(1917)年1月3日、明治出版社発行、5巻1冊から成る洋装本。附録として『中洲講話』(前掲注23)参照)にも所収の11篇の講演記録を収録する。山口角鷹著「中洲書誌」(前同)233~234頁、及び高山節也編「二松學舎大學附屬圖書館藏三島文庫別置本目錄解題」(前同)560頁参照。

27) 学校法人尽誠学園ホームページ「尽誠写真館」掲載「学祖書斎」<http://jinsei-honbu.sakura.ne.jp/photo/index.html> (最終閲覧日2016/11/10)参照。

28) 箕裘とは、父祖の業・家業等を受け継ぐこと。『禮記』學記篇に「良冶の子は、必ず裘を爲るを學び、良弓の子は、必ず箕を爲るを學ぶ。」(原漢文)とあるものを典故とする。

平成29(2017)年、香川短期大学は創立50周年(盡誠学園創立133年)を迎えると聞く。このような記念すべき時期にあたり、創立者大久保彦三郎の人物を顕彰することは、少なからず意義があろう。本稿を草する所以である。また、執筆機会を与えてくださった盡誠学園理事長大久保直明先生、紀要編集委員長・附属図書館長竹安宏匡先生、及び関係者各位には記して謝意を申し述べたい。



# 参考文献一覧（大久保彦三郎関係）

- 1 『盡誠学園百年史』 尽誠学園百年史編集委員会〔編〕, 昭和62 (1987) 年 3 月, 学校法人尽誠学園発行。
- 2 『双陽の道 大久保謙之丞と大久保彦三郎』 馬見州一〔著〕, 2013年 1 月, 言視舎発行。
- 3 『明日に架ける橋』 大久保直明〔著〕, 2014年12月, ファミマ・ドット・コム発行。
- 4 「盡誠舎長 大久保彦三郎先生」 浅岡留吉 (春雪山山人)〔著〕, 『現代讃岐人物評論 (一名讃岐紳士の半面)』 明治37 (1904) 年 8 月, 宮脇開益堂発行, 41～43頁。
- 5 「大久保彦三郎」 四国新聞社〔編〕, 『讃岐人物風景Ⅱ—明治の巨星たち』 昭和59 (1984) 年 2 月, 丸山学芸図書発行, 96～109頁。
- 6 「郷土に生きる教育家群像—46—香川県——有終の美ならざるは九仞 (じん) にして一簣 (き) を虧 (か) く——学校法人・尽誠学園学祖 大久保彦三郎」 勝田英樹〔著〕, 『文部時報』 1394号, 1993年 2 月, ギョウセイ発行, 80～83頁。
- 7 「三島中洲先生とその弟子 (上) —大久保彦三郎を例に一」 松尾政司〔著〕, 『研究紀要』 第 2 集, 2001年 3 月, 二松學舎大学附属高等学校発行, 129～154頁。
- 8 「三島中洲先生とその弟子 (中) —大久保彦三郎を例に一」 松尾政司〔著〕, 『研究紀要』 第 3 集, 2002年 3 月, 二松學舎大学附属高等学校発行, 195～214頁。
- 9 「三島中洲先生とその弟子 (下) —大久保彦三郎を例に一」 松尾政司〔著〕, 『研究紀要』 第 4 集, 2003年 3 月, 二松學舎大学附属高等学校発行, 184～226頁。
- 10 「中洲先生に心酔した大久保兄弟」 松尾政司〔著〕, 『陽明学』 第15号, 2003年 3 月, 二松學舎大学陽明学研究所発行, 178～180頁。
- 11 「三島中洲より大久保彦三郎への書翰」 松尾政司〔著〕, 『研究紀要』 第 7 集, 2006年 3 月, 二松學舎大学附属高等学校発行, 52～116頁。
- 12 「三島中洲より大久保彦三郎への書翰 (続)」 松尾政司〔著〕, 『研究紀要』 第 8 集, 2007年 3 月, 二松學舎大学附属高等学校発行, 34～102頁。
- 13 「私の私学考 (292) 尽誠学園高等学校の目指す教育」 豊嶋知温〔著〕, 『私学経営』 418号, 2009年12月, 私学経営研究会発行, 4～11頁。
- 14 「盡誠学園学祖大久保彦三郎の教育思想に関する考察 (1) 盡誠会雑誌における「教育」と「愛」を中心に」 中俣保志〔著〕, 『香川短期大学紀要』 39号, 2011年 3 月, 香川短期大学発行, 19～25頁。
- 15 「拙詠詩歌二題」 竹安宏匡〔著〕, 『平成27年度 私立短期大学図書館 中国・四国地区協議会ニュース』 第39号, 2016年 3 月, 私立短期大学図書館中国・四国地区協議会発行, 12～13頁。
- 16 「建学の精神「愛 敬 誠」について (更訂大尾)」 竹安宏匡〔著〕, 香川短期大学教養講座 (平成28 [2016] 年10月12日) 講義レジュメ。

